

小山 騰 氏 第 20 回図書館サポートフォーラム賞について

■表彰理由

小山騰氏は 1985 年から 2015 年までケンブリッジ大学図書館日本部長を務められた。同図書館が所蔵する膨大な日本語コレクションには、英国三大日本学者のサトウ、アストン、チェンバレンをはじめとする明治時代の外国人たちが持ち帰った数々の貴重書が残され、平田篤胤や本居宣長らの国学から始まる日本研究の歩みが所蔵されている。2017 年出版の著書『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み—国学から日本学へ』は「国学⇒日本学⇒日本研究」という変遷について、サトウら三人にフォーカスして明示したことの意義は、今後の海外における「Japan Studies」の発展を考える上でも貴重な示唆となっており、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

■表彰講評 水谷長志 氏（表彰委員会委員長）

いささか私事でございますが、この三月末で退職した東京国立近代美術館におりました 2014—2016 の三年間は、文化庁の補助金によりまして、「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」、通称 JAL プロジェクトを企画実現いたしました。これは海外にあって日本の美術および日本研究に関わって、特に資料面から司書、ライブラリアンとして実務に携わる方々を日本に招聘し、研修交流するものでした。当然、ケンブリッジ大学の日本資料コレクションの担当であった小山様にもコンタクトしましたところ、ちょうどご退任されて、アメリカのハーバード大学で博士の学位を修められた才媛を後任に迎えられておりました。その後任のクリスティン・ウィリアムズさんも最終年の 2016 年の JAL プロジェクトにご参加いただきました。

このように海外の日本研究機関で日本関連資料を預かって、海外における“Japan Studies”の発展に図書館員として寄与している日本人が少なからずいらっしゃる、その現場・現状をこのプロジェクトを通して知ることになったわけです。

日本国内におけるこの職業の困難さ、については先ほどの奥泉様の言葉にもある通りですが、海外の日本人図書館員も、例えば CJK として並び称される中韓の攻勢にあって、なかなか厳しい現実も垣間見られました。そのような環境の中から、実務をこなしつつ本書のような、他に書き手が居ない内容のご著作を著された小山氏のご研鑽は、多くの後続の同業を志す者に大きな励みを与えていると強く思うところです。

■受賞のこぼ 小山騰 氏

このたび、名誉ある図書館サポートフォーラム賞をいただくことになり、大変光栄に思っております。また、大変感謝しております。たまたま海外に在住している関係で、4 月 23 日に開催される受賞式に参加することができず、大変心苦しく思いますが、かわりに英国からこのメッセージをお送りして、今回同じ図書館サポートフォーラム賞を受賞されるみなさまとご一緒に受賞の喜びをわかち合い、また同時に図書館サポートフォーラムの関係者のみなさまへの感謝の意を表したいと思っております。まず最初に厚くお礼申し上げます。

今回の受賞は、直接的には昨年刊行いたしました『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩

み：『国学から日本学へ』という出版物に対するものでありますが、受賞する本人としては、海外、特に英国を含めたヨーロッパで日本研究のために日本語コレクションを担当している図書館員を代表していただくものであると理解しております。日本では CEAL (Council on East Asian Libraries, 東亜図書館協会) の活動など、アメリカの図書館における日本語コレクションの事情は割と知られておりますが、比較的ヨーロッパの方の情報が手薄になっているように思われます。そこで、今回の受賞で EAJRS (European Association of Japanese Resources Specialists, 日本資料専門家欧州協会) などの動きにも注意が払われるようになるのではないかと考えております。というのは、『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み：国学から日本学へ』の主要な部分については、2016年にブカレストで開かれた EAJRS の大会で発表したものであるからであります。アメリカだけに限らずヨーロッパにも日本の資料は所蔵されております。

また、『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み：国学から日本学へ』については、実はもともと企画していたケンブリッジ大学図書館の日本語コレクションの歴史に関する書籍の前半部分にあたるもので、その前半部分が大きくなったので、まずその部分を一冊の本として出版した次第であります。後半部分にあたるケンブリッジ大学図書館やロンドン大学東洋アフリカ学院 (SOAS) の近代日本語コレクションの歴史については、近いうちに刊行したいと考えている。戦争と図書館というテーマにそって、英国における近代日本語コレクションの歴史をまとめる予定であります。

私は日本で6年間図書館に勤めた後、海外では合計34年間ほど図書館員として働き、2015年9月末で定年退職いたしました。図書館員の資格を取ったのも英国で、ほとんどの図書館員生活は英国でおくりました。インターネットの出現などにより世界の状況は大きく変わりましたが、取り分け図書館を取り巻く環境は激変したように感じられます。日本でも状況はほとんど同じであると想像いたします。退職した後も週一度ボランティアとして前の職場で働いておりますが、最近の大学図書館の変化に追いつくのに四苦八苦している状態です。Library Discovery Tool などよりも OPAC の方に親しんだ世代で、さらにそれよりも以前には、図書館員として図書館のカード目録を配列しておりましたが、むしろそのような作業をしていた時代が懐かしく感じられます。現在では、英国にいても You Tube などでも日本のテレビ番組なども見ることができ、日本の情報は簡単に手に入りますが、以前は船便で日本から送付される書籍小包に詰め物として入っている古新聞を読んで日本の話題などを知る時代もありました。

過去にも、海外で活躍した図書館員などが図書館サポートフォーラム賞を受賞した例がありますように、図書館サポートフォーラム関係者は海外にも目を向けて来ました。ただ、時代の流れとして図書館のグローバル化はますます加速しております。日本と海外との垣根はまた一段と低くなっております。デジタル化などで貴重書、古典籍、写本、文書、雑誌論文など、さらに通常の書籍までがインターネットで利用できるようになると、インターネット上では、それらの資料はもともとの所蔵館から離れて、あたかも地球規模の図書館から提供されているように感じられます。そのような図書館のあり方までが大きく変わろうとする時代なので、社会的な枠組みなどを乗り越えて活動される図書館サポートフォーラムの役割はますます重要性を増すものと期待されます。今後のご活躍をお祈り申し上げます。